背中から学んだこと

外国語学部教授
池　田　真生子

在外研究で英国オックスフォードへ滞在中に、驚きのニュースが飛び込んできた。「八島先生が 70 歳の特別契約教員の任期満了をまたず、今年度でご退職されることになった。」まだまだお仕事をご一緒させて頂けるものと勝手に思い込んでいただけに、寂しさが止めどなく湧き上がってきた。そして、八島先生とのさまざまな思い出が次々と思い起こされた。

いつも素敵なお召し物とメガネで、優しくチャーミングな八島先生。そんな八島先生とは、私が本学部・研究科に着任させて頂くずっと以前から、学会などでお目に掛かっていたが、若手研究者の間では、尊敬の意を込めて「世界の Yashima」と呼ばせて頂いていた。今ほど、海外での学会発表や国際ジャーナルへの論文投稿が当たり前ではなかった頃から、WTC（Willingness to Communicate）のご研究や「国際的志向性」（International Posture）という概念の提唱で、長年に渡り世界の第一線でご活躍されていたからである。海外での研究発表や国際雑誌でも、八島先生のさまざまな論文がよく引用されていた。同僚として本学部・研究科の一員に加わらせて頂いてからは、先生のように授業や学部運営などの校務、さらには後進の指導を軽やかにされながら、世界レベルでの研究を継続されることが、いかにすごいことかも実感させて頂いた。さらに、2013 年頃から数年に渡り、共同研究をさせて頂いたときには、研究の進め方を通してそのすごさをより一層実感する機会を頂いた。

2012 年の研究科 10 周年記念シンポジウムでは、「多文化世界の外国語教育研究：コミュニケーション論的転回」というタイトルでご講演をされ、その中で、なぜご自身が外国語教育学と異文化コミュニケーション学の 2 領域をまたいで研究を進めてこられたかに言及されていた。外国語を学ぶ中で、学習者が異文化を理解した上で互いにコミュニケーションをとっていくことができれば、世界の平和に繋がっていく。そうした学習者を育て、彼らの学習を支援していくにはどうすればよいのかを追求していく過程で、2 領域をまたぐご研究に従事されるに至ったとお話されていた。その頃、小学校英語での研究を始めていた私は、小学校英語教育における平和教育の重要性を強く認識するようになっていたものの、研究としてどうアプローチすればよいのかわからずにいた。そのようなときに八島先生のご講演を聞き、平和という、ともすれば抽象的な概念の実現に向けて、具体的に、科学的にアプローチしておられる姿勢を見せて

いただき、感動すら覚えた。

ロールモデルとさせて頂くにはあまりにも偉大な八島先生だったが、私たちにはとても気さくに接してくださり、お食事をご一緒させて頂く機会も何度かあった。特に、ロンドンの SOHO にあるインド料理店、同じくロンドンのロイヤルアルバート・ホール近隣のイタリア料理店、そしてバルベラ（関大前）でのひとときなどは、今でもよく覚えている。ロンドンのあまり知られていないけれど素晴らし美術館について、こっそりと教えて頂いたのも良い思い出である。

先生ご退職の一報を異国の地で耳にしたとき、こうした八島先生とのさまざまな思い出が、まさに走馬灯のように駆け巡り、寂しさを感じざるを得なかった。そして同時に、八島先生がご自身の背中で見せてくださったことを忘れずに、これからの研究・教育活動に励みたいと、自身の決意を新たにした。八島先生、これまで本当にありがとうございました。